＝文学コンクール作品講評＝２０２３　牧野節子

優秀賞の「郵便物泥棒とひるねうちゅうじん」は、そのタイトルからも滲み出ているユーモアとゆったり感が好ましく、スラップスティック・コメディっぽいところもあり、舞台上のコントを見ているような印象の、とにもかくにも楽しい作品でした。

小道具の郵便物二つと、それに関わる人たちの物語で、主人公は、高校生のときに、友人の星野颯が宇宙人であることを知った谷田翼。

それから十二年が経ち大人になったいまでも二人のつきあいは続いていて、頻繁に酒を酌み交わしています。ある晩、居酒屋で飲みながら「めっちゃ言いづらいことなんやけどさ」と、颯が翼にもちかけてきた相談事とは……？　そしてその解決策とは……？

三人称→翼の一人称→翼の妻である雪の一人称→翼の一人称、といった具合に人称と視点が変わっていくのが気にはなるのですが、切り替えのタイミングやストーリーの運び方はスムーズで、おはなしづくりのセンスをもっている作者だと思いました。

設定に甘いところがあったり、展開が都合よすぎたり、無駄な描写が多すぎたりと、幾つもの欠点が目につく作品でもありますが、登場人物たちのテンポのよい関西弁に乗せられて、ラストまでスイスイと一気に読むことができました。リズミカルな文体とキャラクターたちの愛らしさが魅力的でその二つが、この作品においては強い力を発揮しています。

作者の藤井律さんは中学二年生。今後はその豊かな発想力を最大限に生かすため、背景や人物の設定をかっちりとすることで、話の説得力を高めていってほしいです。さらにおもしろい作品が書けることでしょう。

ところで今回、最終選考に残った作品の多くについて感じたことですが、初めのシーンはとてもいいのに、途中から文が粗くなったり誤字脱字が目立ったり、後半では、前半の内容と矛盾が生じたりと、精度が下がってしまうのが気になりました。バランスのよい作品に仕上げるためには、最後まで気を抜かずに書くことが大切です。

また、物語は、いちばん初めから順を追って書いていくものだと思っている方が多いかもしれませんが、そんなことはありません。ラストシーンから手をつけてもいいし、自分がその作品のなかでいちばん書きたいと思っている場面から書いていくのもいいでしょう。

最初のシーンから書き出したとしても、順番通りに書く必要はなく、初めを書き、次に終わりを書き、それから真ん中を埋めていくというやり方もあります。そうしてシーンごとに書くことができたら、前後の構成を考えてつなぎあわせましょう。もちろんその際、作品中の「時」の整理と、物語の運びが不自然でないかについては入念なチェックが不可欠ですが。

特に「オチ」が大事な作品は、ラストから書いていったほうがうまくできる場合もあります。オチがばれないように、中盤の「隠し」や序盤の「伏線」を、後ろから考えていくというわけです。作品を書き出してはみたものの、なんだかうまくいかないなと感じているときなどは、固定観念に縛られず、上記のような別の方法を試してみることをおすすめします。思いもかけずすらすらと、書き進めることができるかもしれませんよ。